

第二章 児童会活動・生徒会活動の性格

一 特別教育活動における位置とその教育的意義

1

現代の学校は、さまざまな教育の内容を取り入れて、はち切れそうになっている。特別教育活動というのも、学校教育をはち切れそうにする要素の一つになっている。こういうようにさまざまなものを取り入れるのがよいかどうかは、改めて考え直してみてもよいことである。昔の学校は、読み、書き、そろばんで教育内容もきわめて簡単であった。しかし、読み、書き、そろばんといっても、ただ読むこと、書くこと、そろばんをはじくことだけが教育の内容であったわけではない。本を読み、書く間に、さまざまなしつけも与えられている。社会の一員としての生活態度もつくられている。それらは、読み、書き、そろばんの学習の間に、影の形に添うごとくに結びついて教育されていたのである。それらの学習の間に、友だち同士のつき合いのしかたもおのずから身につけていったのである。

昔はそれでよかつたのに、どうして今は、その子どもたちが、学級会とか、生徒会とかをつくって、それを運営しその中のさまざまな社会的活動をしなければならぬのであろうか。それには、いろいろな理由があるうけれども、一つには社会的な立場で、社会の一員とし

て一定の形式に従って行動するという生活が、現代では非常に重要視されてきているからであろう。昔の人間ももとより社会の一員として生活した。けれどもたとえば封建の世の中では、人々が相互に平等の立場にたつて意見を述べ合い、一つの集団の活動をきめて行動するというようなことはなかったであろう。いな、すこしはあつたとしても、そういうことが基本的なものではなかった。昔はやはりよくいわれるように縦の道徳で、上からきまつたことに従って行動するということを基本にして社会が成り立っていた。だから子どもたちの教育の場合もそういうものを中心と考えられるはずがない。子ども同士が、話し合い、意見を述べ、集団の行動のしかたをみずからきめるなどということがあつても、それが人間にとって、あるいは教育として重要だと考えるような、ものの考え方は、当時の社会の中にはないのである。だからそのまま見すごされてしまうのであろう。

明治から大正へかけての時代でも、教育の中でそういう子どもの活動が重要視されてはいない。それはやはり、社会全体のふんい気が、そういうものを重要だとみるところまでは行っていないかつたということであろう。生徒会とか児童会とかが、最近十年間非常に重くみられて、特別な教育活動という地位を与えられているのは、現代の社会が、そういうものに重きをおいているということである。つまり人間

の社会的立場での行動というか、社会が社会としての行動をする場合に、その成員がみんな、その行動をつくり出すという行動のしかたである。

しかしそういう行動のしかたを教育するのに現在のような特別教育活動などという名称をつけてやらなくてはいけないものなのかどうか、生徒会、児童会という特別教育活動がねらっているものは、実は、現代の生活のしかたそのものである。だからそのまま学校の生活のしかたであってよいのであろう。学級をつくって学習をする場合も、そういう生活のしかたで行なえるはずである。もちろんすべての生活が、そういった社会の行動として営まれるはずはない。学習の中には、個人個人が読書をするということもある。しかしまたみんなで共同して、集団としての学習のしかたをきめ、学級が一定の行動をしてその中で学習が行なわれるということもある。そういう学習が行なわれれば、そこでは当然社会的行動のしかたも身につけていくはずである。生活のしかたというのは、本来形式のみがあるのではなく、ある具体的な内容について存在しているのである。

昔は、学習の中で封建的の社会の中に行動する形式も与えられた。学習の形態そのものがその社会の生活の形式であったわけである。それ以外に、異なった時間を設けて、生活の形式を教えることをしなかった。それでよかったのである。今は、われわれは特に、その形式を取り出して教育しているかのごとくにみえる。そこに問題があるのではない。もっと学校生活の全体が、学習の時間も、新しい生活としての形態をもつてくるように努力することが必要であって、それと別個に、生徒会や、児童会があるなどということはおかしいことだといわなくてはならぬ。

それはおそらく、過渡的な現象ではないか。特別な学級会とか、生

徒会とか、児童会とか、学校生活の他の部面とは遊離して考えられているのは、学校生活全体が、全体として、どのような構造をもち、どのように営まれねばならぬかについて、成熟した段階に到達していないからであろう。そうしていろいろなものが、平板に、系列的に、学校の中へ座をすめて、それに対して子どもは応接に暇がないのである。

2

特別教育活動ということばで、いろいろな性格のものが、ごっちゃにして考えられているけれども、学級会とか、生徒会、児童会などというのは、クラブ活動とはかなり異なったものである。クラブ活動というのは、歴史的にみても、かなり以前から日本の学校の中にも、位置をすめていた。もちろん今とまったく同じ考え方で、同じ形態で行なわれていたわけではないが、しかし基本的には同じラインの中にあるものといつてよい。昔の中学校には、さまざまな運動部があったし、文化部に属するさまざまな部もあった。また女子の学校には、茶道、華道などの部もあつて、それは、やはり生徒のクラブ活動的な役割を果していたのである。ただ小学校には、あまりそうしたものはみられなかった。

これらのクラブ活動は、正規の教科ではないけれども、人間として身につけておいてよいものをそれぞれが自己の個性に応じて習得するということだてまえであつた。そうして、そういう活動の時間を通じて、同じ学校の上級生、下級生がいっしょに活動し、一つの社会をつくって社会的な交渉の場をつくっていた。その中で生徒たちは、より広い社会関係にはいり、またより広い文化的な生活内容をもつのである。こういうことが、小学校のころからずっと行なわれてもよいというのが

戦後の考え方で、ある。おそらく個性的な教育の意味が強く考えられたからであろうが、たしかに教科ばかりでなく、さまざまな分野でさまざまな個性がのびられるように考えることは、現在のよな学校にあっては特に必要なことであろう。

現代の学校が児童生徒に課する学習の内容はしだいにその量を拡大しつつある。それは社会の文化的遺産がしだいに蓄積されていくことと関係があるかもしれない。これも必要、あれも必要と非常に多くのものが子どもに課せられる、個人個人の子どもは、それに圧倒されてしまっている。極端にいえば、ものを覚える機械なんかのようになっている。社会生活に必要な教育内容も、社会全体としては必要であるかも知れないが、個々人の生活にとってみれば、それぞれ必要とすることが異なることがある。たとえば、現在の中学校で学習している自然科学に関する教育内容でも、おとなは理解できない人が多い。しかしおとなはかつてそれを学んだことはあるのである。しかし日々の生活にないから忘れているのである。そういうことは、個人個人についてみればかなり多くの事例をあげることができよう。万人に必要な教育内容というものをと最低のところまで下げることができないが、それ以上は個々の個性に応じて身につけさせるということも考えられてよい、というようなことがいわれ出しているのはこういった事情による。

ところで、こういった事情になっているから、個性をのばす教育、ものをおぼえる機械から脱却する人間としての教育、自己の趣味、関心を中心にして自分を形成させようとする内からの教育というものも望まれてくる。それがクラブ活動というものである。だからクラブ活動は教科の教育の形態ではいけないといわれるのである。もし教科の教育と同じ形態ならクラブという名でまた新しい教科が加わる

ことになって、ますます学校は教育内容過剰の問題に足を突っこむことになる。それは矛盾である。

このように考えると、クラブ活動というのは、子どもの側からいうか、内からの要求というか、そういうものを中心にして、子どもに活動させようとするものである。そういう特別教育活動であると規定することができよう。それに対して、生徒会とか、児童会とかは、また非常にちがった側面を問題にしているということができよう。同じく特別教育活動と呼ばれても、二つのものはその教育的意義が非常にちがうといわなくてはならない。

児童会とか生徒会とかという名称で呼ばれているところの子どもの活動の教育的なねらいは、クラブがねらっているような内からの要求を生かすということではない。前にも述べたように、むしろ外からのものである。外にある社会の形式にあわせて、そういう形式の中で行動する態度、習慣を身につけるといことである。そういう点はむしろ、クラブ活動が内からのものを中心とするに對して、外からのものに重きをおいている。しかし、その形式を外からおしつけるのではなく、そういうものをおのれの内のものとして取り込んで、自主的にそういう社会形式に従って行動できるようにする人間をつくるということであろう。

3

教科の学習においては、いちおう子どもに同一の学習活動を行なわせるのがたてまえである。すべての子どもが、同じ立場で教師に向かい、教材に向かつて、同一水準に到達することを理想としている。生徒会や児童会の活動は、そういうことはない。本質的にそういうこと

は成り立たないのである。

生徒会や児童会は、子どものつくる社会であって、それがいかに単純であり、模範的であつても、一つの社会としての組織をもって、現実的な活動を営んでいくのである。すべての成員が同質の活動することはできない。それが社会であるからには、分業と協業との関係において成り立っている。成員はそれぞれ異なった仕事を分けもち、その異なった仕事の組み合わせられたものが一つの社会としての活動となるのである。生徒会・児童会にはさまざまな係や部があり、それらは、仕事の性格も異なっており、しかたも異なっている。児童会・生徒会の成員としての子どもは、それぞれ異なった生活をするのである。だから生徒会や児童会の活動を通じての教育を、教科の教育のように考えると、あらゆる係や部の経験を順々に子どもに与えなければならぬと考えるようになる。これはしかしナンセンスなことである。もし短い期間で、生徒会や児童会の各係を順々に巡回させて、仕事を覚えさせるといふように考えるのなら、それは教科としてそれぞれおいたほうがよい。たとえば、整美部とか保健部とかはよくある部であるが、その仕事がどういふものかを知らせるのなら、それは教科として教えるようにしたらよい。さて、その上で、一つの社会の中で、それがどう活動するか、現実の生活の営みの中で、どう活動するかを経験させる必要がある。それはどうするかといえば、それはもう教科で教えられることなく、生活の中で実践することである。そうして、社会の中の一つの仕事を担当するものとして、神経を使って、実際に生活するのである。そうした応用動作をして社会的分担にたえる性格をつくり上げていくのである。

生徒会活動とか、児童会活動の教育的意義は性格形成にあるといつてよい。とくに社会的性格というか、あるいは政治的性格というか、

近代社会生活の必要とする行動的実践的性格を形成するのが基本の目標である。

このような性格は、個人がある場に置かれて、そこで全体との間において緊張関係を保つことによつて、しだいにつくられていくのである。そういう場に置かれて、その場でそれれつくり上げられる態度である。

こういう性格は、実は幼児が小学校へはいるころからしだいにつくられているのである。よく言われるように幼児は集団的独語の時代だといふ。集団として話をしていても、実はそれぞれ独語しているのかわりがない。つまり、周囲の状態を考慮して行動し、ものをいう性格にはなっていないのである。しかし、小学校に通ううちにしだいに人の話を聞き、それに反応し、人の気もちを考え、それを計算に入れて行動できるようになる。社会的性格形成の第一歩である。

しかしそれではまだ足りない。もつと社会全体を考え、社会の立場にたつて行動するといふような性格が現在の社会では万人に要求される。いわば社会的自我をもつた人間である。近代社会のように複雑に分化し、しかも一つの全体としてまとまりをもつ必要がある社会に住む人間としては、どうしても社会的自我をもつ必要がある。日本の社会の運命を自分の運命と考えられるような性格を必要とする。そういう性格は今のおとなでも十分に所有しているとはいえない。そういう態度をどうしたら形成できるかを考えたところから、現在の生徒会活動や児童会活動のようなものが生まれ出てきたといえよう。

一方において個性が尊重され、自己の要求を強く主張することもたいていせつなこととされておき、しかも他の一方でそれと反対であるような社会を考慮し、社会の立場で自己の行動を律するような性格も要請されているのである。ここに特別教育活動のむずかしさもあり、また

生徒会や児童会活動の意義の重大さもあるのである。そうしてそこにまたこれらの活動の指導のむずかしさもあるのである。個人的なものも社会的なものも個人の深い内奥において統一されていて、それがあ
るいはクラブ活動において、あるいは生徒会活動において、あるいは
教科の学習において生かされてはならない。その意味からい
えば、生徒会活動や、児童会活動は一つの現象形態であって、その教
育的な意義は、これをとおして、個々人の内奥に深い社会的、個性的
人格を形成するところにあるのである。統一的人格形成の一つの通路
であるともいえよう。

二 学校行事との関連

1

学校における子どもの集団はいちおう子どもの集団であるけれど
も、しかし純然たる子ども自身の集団ではない。自然的な集団として
の遊び仲間とはちがって、学校という社会的な組織としてつくられた
集団である。そこには教師がいて社会の立場を代表してさまざまな制
約を加えている。否むしろデュルケムのいうがごとく社会からの強制
の機関として学校は本来つくられてきたものといったほうがよいで
あろう。そこでは、本来児童が自立的に自分たちの生活をコントロー
ルするという建前はないのである。しかもなお、自主的に生活をコン
トロールするということをさせようとするのは基本的にいえば矛盾
だともいえよう。教師の側にこのへんの認識がなければ、児童会も、
生徒会も猿芝居になってしまう。しかし猿芝居の児童会や生徒会の活
動はそうとうに多く見られるのである。

学校の行事というのは、けっして生徒がみずから考え出した行事で
はない。反対に、社会の側から要請されているものであり、またそれ
ぞれの学校の伝統を表わすものとして成り立っているものもある。け
っしてその時、その学校にいる生徒の考えからだけでどうこうする
というものではない。またそれは教師にとっても同様で、その時学校に
いる教師の考えだけでただちにやめたりつくったりすることができ
るというものではない。そういう現在学校にいる人々の意志をこえて、
存在しているものもあるのである。もちろん、だからといってすべて
の行事がそうだということではない。そういう行事もまたその時、そ
の時の人々の考えによって行なわれているのである。だから旧を改め
て、新しい形の行事にするということもありうる、あるいはまったく
古い行事をやめて新しいものをつくることもあるのである。しかしそ
の場合も、広い世間を考え、長い時間を考えてやらなくてはならない。
つまり、幅の広い考え方でなければ、行事というものは考えられない
のである。

そこで児童会や生徒会と行事との関連の問題であるが、前にいった
ように子どもが自分の集団の生活を営むといっても、本来自分たちで
その生活を制御することができるといって進んでいくわけでは
ない。自分でコントロールするには、学校という社会はあまりに複雑
な社会である。だから子どもたちは、その具体的な学校の中のある一
面だけしか見られない。いわばその抽象された学校の一面において子
どもが存在して、生徒会を運営し、児童会を運営しているのである。
そしてその抽象度がひどければひどいほど、つまり一面的にしか学校
を考えないという状態に置かれることが強ければ強いほど、子どもの
活動は、猿芝居に近くなるのである。学校全体のさまざまな関係がわ
からないくせに、わからなければできないことを、口先だけで相談し

たり、やったりしているということになると、ほとんど意味のないことになってしまふのである。

しかし実は、児童会や生徒会は、そういう猿芝居的段階から、しだいにそうでない現実的段階にはいる過程をたどることにおいて意味があるといえよう。たとえば運動会という学校の行事がある。これは学校の行事として毎年行なわれることになっているのが普通の学校の例である。これを行うのは実際には生徒である。従来例だと学校の運動会は一切適切教師の側で計画し、生徒はロボットのごとく、教師に振り回されて動くだけである。運動会前になるといろいろ準備をするけれども、子どものほうにいわせれば、なぜそう一生懸命に準備するのかさえもよくわからないのである。しかし運動会では実際には生徒が活動するのであるが、その子どものほうは、先生にいわれるままに動いている。先生はむしろ子どもにそういうことをやらせて、演出家として、親にいろいろなことを演出してみせている。皮肉にいわば運動会は先生の発表会で、子どもは使役だということもいえないわけではない。事実運動会を行うということの中には、先生が学校の教育のようすを親に発表するという意味も含まれているのである。子どもはもちろん運動会は好きである。しかしそれは教師がおぜん立てした上につて、ただ個々の競技をたのしむだけである。子どもには、教師の意図するところがよくはわからない。だから運動会という行事を計画して、それを実施しようなどということは子どもには考えられない。だから運動会は子どもたちの活動でありながら子どもたちによつては運営されない。子どもはただ動かされるだけである。しかしこの学校行事に、子どもが直接タッチし、その運営に多少とも参加するかどうか、子どもが運動会のであろうか。子どもが運動会の運営全体にタッチするということは、教育的には非常によいことであることは何人

も異存あるまい。子どもがただ教師の命ずるままに動いて、猿芝居のの前でやってみせるよりは、みずから計画して親を呼んで、自己表現をやるという建前の方がはるかに近代的であり、教育的意味がある。運動会は学校という社会が、それをつくっている全体社会、地域社会に対して責任を果たす意味をもっているが、それがただ教師だけのものでなく、子どもの考え方となったということである。子どもがそう自覚してやることになることがたいせつである。そういうことを通して、子どもたちは自分たちのつくっている社会が自分だけのものではなく、広い社会との関連において成り立っていることを知るであろう。そしてそういう場において行動することによって、子どもたちの社会的行動が一つ一つ具体的になるのである。

われわれのつくるさまざまな社会で、どんな小さなグループでも、広い全体社会との関連なしに存在しうるものはない。そういう広い社会を考えないものは、夢の世界である。そういう夢の世界からしだいに現実の世界にはいれるのが子どもの教育であるが、運動会というような行事を子どもが運営することはそういう役割を果たすことになるのである。

2

今一例をあげて学校行事との関連する場所を述べたのであるが、生徒会活動とか児童会活動というのは、本来、行事的な性格をもっているといつてよい。というのは、学校はけつして臨時につくられるその時その時のグループ活動でなく、長い時間にわたつて存在する一つの生命体のようなものである。その中に、子どもがいて、生徒会、児童会をつくつていっていることは、子どもたちが、自分たちの社会を長い生命をもつたものとして認識し、その生命体を育てるといふ行動を

するということである。つまり長い時間をかけて育てる社会である。その時、その時の思いつきで生徒会活動や児童会活動が行なわれるのではないのである。ここから生徒会や児童会が、一つのリズムをもった生活の営みが必要としてくるのである。それはさまざまな行事を必然的に生み出してくる。

さまざまな行事を必要とするということは、同時にその学校が置かれている全体社会、地域社会との関連において行事が営まれるということの意味する。生活のリズムというのは、抽象された時間的リズムの問題ではなく、具体的な社会的時間のリズムである。一定空間に、一定の風土の中で、一定の内容をもった具体的生活体としてのものリズムである。われわれはいつもそういうリズムの中で生活をしているのである。学校集団の生活のリズムもまたそういうものから別個のものであるはずがない。たとえば学校が四月にはじまって三月に終るのも、社会の生活のリズムの上に乗っているのである。生徒会や児童会がいかに子どものものであっても、そういうリズムを無視するわけにはいかない。そういう地盤の上で、それ自体の特色を生み出すのである。

子どもが生徒会や児童会を運営するということは、そういう時間的、空間的な関連の中にはいることを意味する。つまり社会のリズムに乗ることを意味する。それが学校行事との関連ということになってくるのである。本来は関連などというべきことではない。学校の行事も生徒会や児童会とともに、社会の行事である。

子どもには、否おとなであつても、社会の時間的空間的な性格を十分認識して、そこで社会の行動をつくり出していくことはむずかしいことである。そこでそういう環境の中へ入れて、そこで社会を肉体的に感じさせることが必要である。近代社会では、すべての人間

がそういう場に置かれて行動することが必要になってきているのである。

三 生活指導との関連

1

生活指導との関連の問題が次の問題である。生活指導ということばは、人々によっていろいろな解されていて、あいまいなことばである。しかし最初にこれを規定するなどということはやめよう。私は最近高等学校の生活指導の主任の先生方との研究会で次のような話を聞いた。それは高等学校の生徒会の総会の出席がどこもあまりかんばしくないという話である。ほおっておいたら規定の数にたりなくて流会になってしまふという話であつた。それで先生方は、どうするかという相談をしておられた。先生方の意見で最も多くまた最も効果があるといわれるのは、出席をとることにしたらどうかということであつた。その他いろいろの方法が話し合われていたが、私に興味のあつたのは、つまり生徒総会を流会にしない方法として出席をとったり、あるいはその他の方法で生徒に奨励することが、先生方の中心問題として話し合われているという事実であつた。ここには生徒会の問題と、生活指導の問題との二つが関連する微妙な問題がある。

かりに出席をとることによって、生徒総会が成り立つとする。しかしそれで生徒総会は成り立つたとしてどれだけの意味があるか。生徒が総会を開いて、重要な議題を議決して生徒会として活動する方針や内容をきめたりするということは、どうしても必要なことである。それは出席をとるとらないの問題でなく、学校の生徒としての行動と

して、どうしても必要なことである。それは、国民として国会議員の選挙に投票をすることと同じようなものである。だから出席の問題にかかわらず、生徒は生徒総会には出席すべきものである。ところが、実際には生徒は、ほおっておけば出席しないのである。どうしてであろうか。まず考えられるのは、総会に出席する必要があるのだということについて、十分な認識がないということである。もしそうならばそういう認識を与えることが必要である。そういう認識を与えないで、ただ出席をとることに出席させようとするのは、ならぬ教育になっていないといふべきであろう。教育という見地から考えれば、生徒総会という形式が成り立つことでなく、生徒が生徒総会についての正しい態度ができるということである。正しい態度とはそれを理解し、正しい理解にもとづいた行動ができるということである。

ところで生徒総会についての理解は生徒に与えてあるけれども、生徒がそれを守らないのだということもある。否むしろそれが一般的なこともかもしれない。生徒総会に出席する必要性は知っているけれども、生徒はそれを実践しないのだということである。ここにまた微妙な問題がある。事実知っているけれども実践しないという生徒の心の中にはいろいろこういう考え方なものをさぐってみると、いろいろな問題が含まれていることがわかるであろう。たとえば、生徒総会などというのは、つまらないというようなことがあるかもしれない。一定の形式に従って、たとえば、会社の株主総会のごとく、議事が進行して、出席している人はただ相手をするという程度のことをするだけで、あまり意味がないではないかというように感ずる者もあるであろう。いちおうそういう面もないわけではない。そういう種類の会合はたしかに形式的にはこぼれて、あまり実質的にならないのが一般の実情である。しかしその場合のわれわれの態度としては、それだからと

いつて出席しないでよいという理屈にはならない。そういうつまらないものでも出席しなければならぬのであろう。そこにはがまんがいるかもしれない。退屈な議事をがまんして聞いていなくてはならぬ。相手もしなくてはならぬ。しかしそれが生徒総会を本当成り立たせるためのわれわれの行動のしかただという確信が必要である。そういう態度をもたせることは教育の問題としては重大なことである。

しかし、つまらないものでも、がまんして出席しなくてはならぬという点だけでは実は本当ではない。本当につまらないものなら、なにもがまんして出席する必要がないのである。むしろそういうものはなくなすほうがよいのである。出席しなくてはならぬ理由は、だからやはりそれが必要だからなのである。ではつまらないというのは、そう考える人の考え方がいけないのか。そうばかりもいえないところがあつた。やはりつまらないところがある。そういう事実を認めて生徒はやはり出席しなくてはならない。それは、出席することによって、その本質的な意義をますます発達させ、よりよくして、つまらなくないものにするという考え方があつたからである。つまり建設的な行動なのである。今行ないうる建設的な行動として出席することが要請されているのである。こういう理解と認識をもとにして、出席ということも成り立つのである。

しかしもつと広い立場で考えれば、出席しないで建設的な行動をするということも考えられるかもしれない。つまり総会という形ではなく別の形で、生徒会活動を運営するということもありうる。そうして、そう考えるがゆえに出席しないという理屈も成り立つかもしれない。しかしそれは、本当は今ある総会の形式の中で意見を表明して、多くの人の賛成を得て、新しい運営のしかたを建設するという方式をとつて行なわれるべきであらう。だからそういう場合もやはり総会には出

席すべきであろう。

あるいは総会に意見を表明して、それがいれられなかったという理由で出席してもつまらないという考え方の生徒もいるかもしれない。そして、その生徒は自分の正しい意見がいれられないのはおもしろくないと考えているという場合もあろう。しかしそういう生徒に対しては、自分の意見がかりに正しくとも、それがいれられないからといって、今成立している基本的な形式をこわすべきでないというようにいふべきであろう。また第一に、自分の意見が正しいと信じていることも常に反省する必要があることはいわなくてはならぬ。自分の正しさを信ずることはよいけれども、人々の中において、それを検証し、人々を納得させることを通して、ますますその正しさを充実させる必要があることは、常にわれわれの基本の態度としていなくてはならぬであろう。そうでなくて自分が正しいけれども、他人がわからないのだというような単純な考え方では、われわれの社会の行動のしかたを建設することはできない。事実多くの人々がまちがっており、少数の意見の方が正しい場合もある。しかしその場合も、正しい意見を通す努力を通じて正しい意見が用いられ、正しい建設が行なわれるのであって、その努力は、現在の生活の形式のところでもとられなければならない。こう考えれば、総会に出席して意見を述べ、よりよくすることに向かって協力することはやはり必要である。

こういうことを長々と述べたのは、実はこういう考え方が生徒の中に、実践的な考え方として身につけていくことが、たいせつな教育の目標であると考えたからである。このようなさまざまな考え方は、まだいろいろあるであろう。生徒のひとりひとりについてそれぞれニュアンスの異なる考え方がみられると思う。それらのさまざまな考え方はどれも一面の真実をもっており、一面の誤りをもっているかも

しれない。そういうものを乗り越えて、正しい考え方にもとづいて、正しい行動をするように、そうして生徒の集団としての生徒会が、建設的な行動をしていくようにするのが、教育の目標であろう。そしてそこに、生徒の生活指導と生徒会活動とがきわめて奥深いところでふれ合っているのである。生徒会の総会への出席ということ一つを取り上げてみても、生徒の生活の考え方についてのきわめて深い接点があり、それを通じて生徒の生活行動が具体的に指導され、それにもとづいて、全体の社会としての行動もまた発展していく。

以上高等学校の例をあげたが、この基本的な考え方は小・中学校においても変わらないのである。小学校・中学校では、生徒がもつともどもであるから、容易に、先生の指示に従って行動する。そこで、高校の生徒のような現象は現れないであろう。しかし、それだからといって、高校生のもっているような問題はないかといえはるのである。ただそれを言わなかったり、言えなかったりするのである。また全体のふんい気が先生の指示どおり動くというようなになっているから、ただ動いているだけなのである。それをもし、生徒が本当にわかつて行動しているというように誤認したら、大きなまちがいのもとになる。もし本当にわかつて、行動しているのならば、高等学校にはいつてから、生徒会を流会させたりして、そういうものに関心がないという事態が現れてくるのはおかしいのである。高校にはいつてから前のような問題が起こってくるのはつまり、小・中学校の児童会・生徒会活動が本物でなかったからである。

という意味は、本物の生徒会活動ができるように本当に生活指導をやつていかなかったからである。本当に生活をどういう考えで、どう処理していくかについて、考え方や、態度を養ってこなかったからである。生活指導と生徒会活動との関連とは、以上のようなところにある

のである

2

以上は、一つの例をあげて、生活指導と、児童会活動・生徒会活動の関連する場所微妙なふれ合いの場所を述べたのであるが、実はそれは二つの概念として考えたから、ふれ合いなどといったのである。生活指導とは児童・生徒の教育の目標、内容をいった概念であり、生徒会活動とか、児童会活動というのは生徒の活動の形式をいった定義である。この二つの概念はおなじ平面で考えられるものではない。だからつまり児童会・生徒会の活動を通して生徒の生活指導がなされるのだというように考えたらよいのであろう。そして前に述べたのは生徒会活動を行なわせるにも、本質的に考えさせ、本質的に行動させることが必要で、それにはどこまでも具体的にその活動の場面で起つてくることを取り上げ、その場で教育しなければならないということとを述べたのである。そういう方法を通じて、はじめて、生徒会活動が本質的意義を発揮し、生活の指導となるのであるだから、高校の例で述べたように、出席をとるといった形式的な処置で、生徒会をかりに成立させたとしてもそれではほとんど教育にならないということになるのである。

ここでもう一つ注意しておかなくてはならぬことは、生活指導というのにはなにも生徒会活動を通じてだけ、行なわれるものではないということである。そういう考え方では、生徒会活動を通ずる生活指導もまたうまくいかなないのである。というのは、生活指導は、学校生活の全面において行なわれるものである。国語や算数や、音楽やその他すべての教科の学習の中でもまた、生徒が、そういう教科の学習の態度や、その学習を学級で行なうとき他の人々との関係を学ぶのである。

それは生活の指導というべきである。たとえば算数の一つの問題を解く時にも、その問題がわからない時に、どういう態度で解こうとするのか、そこには生活指導の問題がある。あるいはまた宿題を出されて、それをどう処理するかという時にも、子どもの生活態度を指導する問題があるのである。このことはおうおうにして忘れられがちになるけれどもたいせつなことである。

そうして、生徒会活動とか、児童会活動とかいう活動は、それが生徒の自主的な行動の形式として、生徒のもっている生活態度を基盤として行なうという色彩が強いただけそれだけ、日ごろの生活指導の結果がそこに集約的に現われるのである。むしろ生活指導の結果が生徒会活動や児童会活動の成否を決定するといっても過言でない。

ところがおうおうにして一般の考え方は逆である。氷山の一角のように一番頂点である生徒会活動や児童会活動のところ、なにか大きな指導ができると考えている。そうしてそこだけで問題を処理しようとする、出席をとって、生徒会を成立せしめようという形式主義に陥るのである。むしろ日ごろの積み上げのほうがたいせつであって、ふだんから、社会生活についての考え方、行動のしかたを折にふれて指導していくことがたいせつなのである。しかしそういうことになる、これはもう、教師の世界観といったものとの関係になつてくるので、特に指導しようとして指導できることばかりでない。たとえば教師がなにか教師の仲間の会合に出なくてはならぬとする。その場合に、生徒会に対すると同じようなことが教師自身にあるであろう。その時教師がどういうように考えるか、その考え方は、日常の学習の中でも、さまざまな場面に現われてきているのである。それに生徒は影響されているのである。教師仲間の会合に対して、教師がつまらないから、いいかげんに処理しておこうという考え方があれば、生徒会に、生徒

が出席しない時に、本当のことが教師に伝えるはずがない。また表面上もつもらしいことをいってもすぐ底がみえるのである。そうして結局教育の効果があがらないのである。出席をとることによって、生徒会を形だけ成立させようなどという考え方は、結局そういう教師の世界観の弱さからくるのである。ここまで考えてくると、生活指導とは教師と生徒の生活の一体化したところから生まれてくるものだということがわかれると思う。その場合の教師のものの考え方、態度に弱さがあれば、指導もまた弱いのである。われわれはそこで考えなければならぬのは、われわれの弱さが、結局子どもも弱さとなって現われてくるのであるということである。われわれは、自分の弱さを棚にあげておいて、子どもの弱さだけを突きたがるが、それは教育者としてとるべきでないということであ

ろう。特に生活指導においては、われわれの影が子どもであることを考えて、みずからを強くする努力をする以外に道はないであろう。そしてそれが結局、生徒会や児童会を強くするということを深く反省しなくてはならぬ。否生徒会とか児童会という形式でなく、生徒や児童がみずからの社会をよりよく建設しようという態度が強くなるということであろう。それは教師が、つまりおとなが自分の社会をよりよくしようという生活、実践の影なのである。

最後にもう一つ、生徒会活動や児童会活動でどのような生活態度が形成されるかを考えてみるのもおもしろいと思う。これは、ここただ一般論として述べるのではなく、具体的に言われているそれぞれの学校の活動に即して考えてみるとよいであろう。ここではただ考え方を述べて、おくとどめる。たとえば、文部省の道徳の指導要領をあけてみるとよい。そこには、責任をとるとか、人の意見を聞くとか、社会に奉仕するとか、自己の信念を守るとかささまざまなことがある。

それらのいわゆる指導目標か内容を考えてみるとよい。その中で主として社会的な関係において発揮されると考えられる目標は、児童会・生徒会の活動でほとんど発揮される必要のあるものばかりである。ただ形式的にそういう会が運営されればよいと考えるのでなかったら、その活動では、道徳の指導要領にあることは、十分に実行されていないのはならぬはずである。だから教師が、そういう点を一つ一つ具体的にわきまえていけば、あるいは児童会の全体会議の場に、あるいは個々のクラブ活動の場で、それぞれ具体的に生活行動のあり方として指導できるはずであり、教師と子どもが一体になって、そのような人間の道徳的理想を実現することに努力することができるはずである。こうして、児童会や生徒会が、子どもの社会生活建設の意欲的な実践の場となるのが、生活を指導することなのであり、正しい道徳的社会を築き上げることになるのである。それが子どもを育てるといふことであろう。

＞ 矢口 新 <